Ⓝ

国　　語

（200点 80分）

注　意　事　項

1　**試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。**

2　この問題冊子は，42ページあります。問題は4問あり，第1問，第2問は「近代以降の文章」，第3問は「古文」，第4問は「漢文」の問題です。

なお，大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも，試験時間は80分です。

3　試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。

4　**解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので，監督者の指示に従って，それぞれ正しく記入し，マークしなさい。**

①　**受験番号欄**

受験番号（数字及び英字）を**記入**し，さらにその下のマーク欄に**マーク**しなさい。

正しくマークされていない場合は，採点できないことがあります。

②　**氏名欄，試験場コード欄**

氏名・フリガナ及び**試験場コード**（数字）を**記入**しなさい。

5　解答は，解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば，［10］と表示のある問いに対して③と解答する場合は，次の（例）のように**解答番号10の解答欄の③にマーク**しなさい。

（例）

解答番号	解　答　欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

6　問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけません。

7　試験終了後，問題冊子は持ち帰りなさい。

国語

（解答番号 1 ～ 38）

第1問　次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点　50）

私たちは昼と夜をまったく別の空間として体験する。とくに夜の闇のなかにいると、空間のなかに闇が溶けているのではなく、逆に闇そのものが空間を形成しているのではないかと思えてくる。闇と空間は一体となって私たちにはたらきかける。ミンコフスキー(注1)は、夜の闇を昼の「明るい空間」に対立させたうえで、その積極的な価値に注目する。

……夜は死せるなにものかでもない。ただそれはそれに固有の生命をもっている。夜に於ても、私は梟の鳴き声や仲間の呼び声を聞いたり、はるか遠くに微かな光が尾をひくのを認めたりすることがある。しかしこれらすべての印象は、明るい空間が形成するのとは全然異なった基盤の上に、繰り広げられるであろう。この基盤は、生ける自我と一種特別な関係にあり、明るい空間の場合とはまったく異なった仕方で、自我に与えられるであろう。

明るい空間のなかでは、私たちは視覚によってものをとらえることができる。私たちとものあいだ、私たちと空間のあいだを距離がへだてている。距離は物差で測定できる量的なもので、この距離を媒介にして、私たちは空間と間接的な関係を結ぶ。私たちと空間のあいだを「距離」がへだてているため、空間が私たちに直接触れることはない。

一方、A闇は「明るい空間」とはまったく別の方法で私たちにはたらきかける。明るい空間のなかでは視覚が優先し、その結果、他の身体感覚が抑制される。ところが闇のなかでは、視覚にかわって、明るい空間のなかで抑制されていた身体感覚がよびさまされ、その身体感覚による空間把握が活発化する。私たちの身体は空間に直接触れ合い、空間が私たちの身体に浸透するように感じられる。空間と私たちはひとつに溶けあう。それは「物質的」で、「手触り」のあるものだ。明るい空間はよそよそしいが、暗い空間はなれなれしい。恋人たちの愛のささやきは、明るい空間よりも暗い空間のなかでこそふさわしい。

闇のなかでは、私たちと空間はある共通の雰囲気に参与している。私たちを支配するのは、ミンコフスキーが指摘するよう

に、あらゆる方向から私たちを包みこむ「深さ」の次元である。それは気配に満ち、神秘性を帯びている。

「深さ」は私たちの前にあるのではない。私たちのまわりにあって、私たちを包みこむ。しかも私たちの五感全体をつらぬき、身体全体に浸透する共感覚的な体験である。

近代の空間が失ってきたのは、実は深さの次元である。近代建築がめざしてきたのは明るい空間の実現であった。ピロティ(注2)、連続窓、ガラスの壁、陸屋根は、近代建築が明るい空間を実現するために開発した(ア)ソウチである。人工照明の発達がそれに(イ)ハクシャをかける。明るい空間が実現するにつれ、**B**視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ。視覚はものと空間を対象化する。空間は測定可能な量に還元され、空間を支配するのは距離であり、ひろがりであると考えられるようになった。それと同時に、たがいに異なる意味や価値を帯びた「場所性」が空間から(ウ)ハイジョされ、空間のあらゆる場所は人工的に均質化されることになった。こうして、場所における違いをもたないユークリッド的な均質空間(注3)ができあがる。

深さは、空間的には水平方向における深さをあらわしている。幅に対する奥行(おくゆき)である。しかし、均質化された近代の空間にはこの奥行が存在しない。なぜなら、均質空間はどの場所も無性格で取り換え可能だから、奥行は横から見られた幅であり、奥行と幅は相対化された距離に還元されてしまうからだ。均質空間では、幅も奥行も「距離」という次元に置き換えられる。したがって、そこにあるのは空間のひろがりだけであり、深さがない。

ミンコフスキーが深さについて語っているのは、もっぱら空間的な意味においてである。一般に西洋では、深さは水平方向における深さであり、純粋に空間的な意味しかもっていないようである。それに対して、わが国では深さは水平方向における深さであると同時に、時間的な長さをも意味する。深さは空間的であるとともに時間的な意味をもつ。それを端的にあらわしたことばが「奥」である。奥は日常的にもよく使われることばだ。

たとえば来客を家のなかに案内するさい、よく「奥へどうぞ」などという。具体的に座敷とか応接間といわずに「奥」という。こ

の場合の「奥」とはいったい何を指しているのだろうか。それが具体的な部屋を指しているのでないことは明らかである。「座敷へどうぞ」「応接間へどうぞ」といわれれば、部屋のイメージを頭に思い描くこともできる。だが奥といわれると、少しおおげさにいえば、いったいどこへつれて行かれるのだろうという一抹の不安が心をよぎる。奥は漠然として、つかみどころがない。奥は具体的な対象物を指すことばではなく、漠然とあるなにものかを暗示することばである。このあたりに、日本語に固有な奥ということばの深い意味がかくされているように思われる。こころみに辞書(注4)を引いてみると、奥には次のような意味がある。

「外(と)」「端(はし)」「口(くち)」の対。オキ(沖)と同根。空間的には、入口から深く入った所で、人に見せず大事にする所をいうのが原義。そこにとどくには多くの時間が経過するので、時間の意に転ずると、晩(おそ)いこと。また、最後・行く先・将来の意。〈空間的に場所について〉入口から深く入った所。最も深くて人のゆかない、神秘的な所。末尾。〈「道の奥」の意で〉奥州。みちのく。奥まった部屋。〈心理的に大切にする所の意で〉心の底。芸の秘奥。貴人の妻の居室。貴人の妻。奥方。夫人。〈時間に転用して〉晩(おそ)いこと。また、最後。将来。行く先。

要するに、奥は空間的にも時間的にも到達しがたい最終的な場所、時間を指している。それだけではない。奥義、奥伝ということばがあるように、奥には空間的、時間的な意味のほかに、深遠ではかりがたいという心理的な意味もある。**C** 奥は空間的、時間的、心理的なさまざまな意味を含みながらひろく日本の文化を支えている。

奥を具体的に体験できる場所に日本の古い神社がある。神社の境内は鎮守の森とよばれる深い森につつまれ、その森を分け入るように長い参道が続いている。参道は社殿に向かってまっすぐにのびているのではない。右に左に折れ曲がり、つま先あがりの坂道になったり険しい石段になったり、実に変化に富んでいる。参道の両脇(りょうわき)には鳥居や献燈(けんとう)がいくつもならび、うっそうとした木立や苔(こけ)むした庭石などとともに巧みに配されている。そして手水舎(注5)(てみずや)、回廊、拝殿、玉垣、正殿へと続くが、神社の中心で

ある正殿には仏教寺院のように偶像が安置されているわけではない。せいぜい神の依代(注6)としての鏡があるくらいだ。仏教寺院の中心は仏像とそれが安置してある本堂だが、神社にはそれに相当するものがない。上田篤(注7)氏が指摘するように、神社の中心はむしろ参道である。見通しのきかない曲がりくねった参道を一歩一歩(エ)フみしめながら歩いて行くと、私たちの精神はしだいに高揚し、聖なるものに近づいて行くような感じをいだく。そのとき、私たちは奥を感じる。奥は最終的な建物ではなく、そこへいたるまでのプロセスを造形化したものだといえる。

奥について最初のまとまった論稿を発表したのは槇文彦(注8)氏である。槇氏は奥の特性を次のように説明する。

奥性は最後に到達した極点として、そのものにクライマックスはない場合が多い。そこへたどりつくプロセスにドラマと儀式性を求める。つまり高さでなく水平的な深さの演出だからである。多くの寺社に至る道が曲折し、僅かな高低差とか、樹木の存在が、見え隠れの論理に従って利用される。それは時間という次数(注9)を含めた空間体験の構築である。

奥は時間的なヨウ(オ)ソを含む概念である。その点、「間」との類似性が考えられて興味深い。奥は純粋に空間的な意味での奥行ではなく、目的へ向かうプロセスの演出によって私たちの心のなかに生じる心理的な距離感覚であり、時間感覚である。人間の身体感覚に深くかかわる概念だといえる。また槇氏は、奥は「見る人、つくる人の心のなかでの原点」であり、「見えざる中心」だという。さきほどの「奥へどうぞ」ということばには、案内する側とされる側の両者の心のなかの原点にむかって行くというニュアンスがある。**D**案内された瞬間から、すでに奥の空間体験がはじまっているのである。奥は最終的に到達すべき建物や部屋が目的ではなく、そこへいたるプロセスに儀式と演出を求めるからだ。

(狩野敏次「住居空間の心身論――『奥』の日本文化」による。ただし、本文の一部を改変した)

（注）

1　ミンコフスキー――フランスで活躍した精神科医・哲学者（一八八五～一九七二）。引用は『生きられる時間』による。

2　ピロティ、連続窓、ガラスの壁、陸屋根――ピロティは、二階以上を部屋とし、一階を柱だけにした建物の一階部分。連続窓・ガラスの壁は、広範な視野を可能にした近代建築技法。陸屋根は、勾配（こうばい）が少なく、ほとんど水平な屋根。

3　ユークリッド――紀元前三〇〇年ごろのギリシアの数学者。それまでの幾何学を集大成した。

4　辞書――ここでは『岩波古語辞典』を指す。

5　手水舎、回廊、拝殿、玉垣、正殿――手水舎は、神社で参拝者が手を洗い、口をすすぐための水盤を置く建物。ちょうずや、とも読む。回廊、拝殿、玉垣、正殿は、いずれも神社を構成する施設。

6　依代――神を祭る際、神霊の代わりとして据えたもの。

7　上田篤――建築家・建築学者。指摘は『鎮守の森』による。

8　槇文彦――建築家・建築学者。引用は『見えがくれする都市』による。

9　次数――文字因数の数（x^2なら2、x^3なら3）を指す数学用語。ここでは複雑さの度合いを示す。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5 。

(ア) ソウチ 1
① 直ちにソウサク隊を出す
② 大きなソウドウを引き起こす
③ 鍛練でソウケンな身体をつくる
④ 面接でのフクソウに気をつかう
⑤ 古いチソウから化石を採る

(イ) ハクシャ 2
① ハクリョクに欠ける
② ハクジョウな態度をとる
③ ハクシュを送る
④ ハクシキを誇る
⑤ ハクジョウさせられる

(ウ) ハイジョ 3
① すぐれた人材がハイシュツする
② 少数意見をハイセキしない
③ フハイした社会を浄化したい
④ ハイシン行為の責任を問う
⑤ 優勝してシュクハイをあげる

(エ) フみしめ 4
① 仮面ブトウ会を開く
② 改正案をケントウする
③ 注文がサットウする
④ 路面がトウケツする
⑤ 旅先でトウナンにあう

(オ) ヨウソ 5
① ソセンを敬う
② ソゼイを課す
③ ソボクな人柄
④ 人間関係がソエンになる
⑤ ついにソショウを起こす

問2　傍線部A「闇は『明るい空間』とはまったく別の方法で私たちにはたらきかける」とあるが、そのはたらきかけは私たちにどのような状況をもたらすか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 視覚的な距離によってへだてられていた私たちの身体と空間とが親密な関係になり、ある共通の雰囲気にともに参与させられる。

② 物差で測定できる量的な距離で空間を視覚化する能力が奪われ、私たちの身体全体に浸透する共感覚的な体験も抑制させられる。

③ 距離を媒介として結ばれていた私たちの身体と空間との関係が変容し、もっぱら視覚的な効果によって私たちを包み込む深さを認識させられる。

④ 視覚ではなく身体感覚で距離がとらえられ、その結果として、空間と間接的な関係を結ぶ私たちの感覚が活性化させられる。

⑤ 視覚のもつ距離の感覚がいっそう鋭敏になり、私たちの身体と空間とが直接触れ合い、ひとつに溶け合うように感じさせられる。

問3　傍線部B「視覚を中心にした身体感覚の制度化がすすんだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 身体とは一線を画していた視覚が、身体感覚の中に吸収されるようになってきた、ということ。
② 身体感覚相互の優劣関係が、視覚を軸にするかたちで統御されてきた、ということ。
③ 視覚以外の身体感覚が、人為的な力によって退化を余儀なくされてきた、ということ。
④ 五感全体をつらぬく共感覚を、視覚だけが独占するようになってきた、ということ。
⑤ 視覚の特権性や優位性を、人々が自発的に享受するようになってきた、ということ。

問4 傍線部C「奥は空間的、時間的、心理的なさまざまな意味を含みながらひろく日本の文化を支えている」とあるが、その「奥」の例として、筆者は神社の参道を挙げている。神社の参道における体験のどのような点に筆者は注目しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 神社の参道では、人は神の依代である鏡を安置してある正殿にたどりつき、そこにいたるまでの神社独特の距離の長さを実感できる点。

② 神社の参道では、人は信仰の対象である鎮守の森に分け入っていき、信仰を求める心が優しく包み込まれていることに気づかされる点。

③ 神社の参道では、人は見通しのきかない曲がりくねった道を正殿に向かって時間をかけて進み、聖なるものに近づく高揚感を味わうことができる点。

④ 神社の参道では、人は献燈や庭石を配した木立の中に続く石段をのぼり、自然と人間の精神とが調和した環境に身を置く充足感をいだくことができる点。

⑤ 神社の参道では、人は最終的な建物である正殿をめざしてひたすら歩き、正殿の中の鏡に向き合うことでそれまでのプロセスを再認識することができる点。

問5　傍線部D「案内された瞬間から、すでに奥の空間体験がはじまっている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 「奥へどうぞ」と言われたときから、空間的にも時間的にも到達しがたい「奥」を、到達点そのものではなく、そこにいたる過程において心理的な距離や時間として感じること。

② 「奥へどうぞ」と言われたときから、空間的な意味をもつ「奥」を、そこにいたる測定可能な距離としてだけではなく、明確に限定された時間としても感じること。

③ 「奥へどうぞ」と言われたときから、深遠ではかりがたい「奥」を、数量に還元できる対象とすることで、無性格で取り替え可能な距離や時間として感じること。

④ 「奥へどうぞ」と言われたときから、不安にさせられる「奥」を、案内する側とされる側が同じ対象物をめざして一体感をもつことで、親密な距離や時間として感じること。

⑤ 「奥へどうぞ」と言われたときから、闇に包まれて気配にみちている「奥」を、神秘的な儀式が行われている空間とすることで、人知を超えた心理的な距離や時間として感じること。

問6　この文章では論を進めるうえで、具体的な事例を挙げたり、他の文献を取り上げたりしている。筆者がそのような論の進め方をする意図の説明として最も適当なものを、次のA群・B群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 10 ・ 11 。

A群 10

① ピロティ、連続窓等の例は、空間を量的に把握することによって奥行という存在を消してきた近代建築の価値観の妥当性を確認するために用いられている。

② ピロティ、連続窓等の例は、人工照明の発達によってひろがりのある空間の実現をめざすようになってきた近代建築の技術的進歩を評価するために用いられている。

③ ピロティ、連続窓等の例は、近代建築が闇の追放によってもたらした空間の均質化が内包する問題点を引き出すために用いられている。

④ ピロティ、連続窓等の例は、近代建築が明るい空間をめざすことによって深さという次元を失ってしまった誤りの重大さを証明するために用いられている。

B群 11

① ミンコフスキーの文章を取り上げたのは、近代における西洋と伝統的な日本とのあいだの、空間のとらえ方の違いを明確にするためである。

② 奥の意味についての辞書の説明を取り上げたのは、日本語に固有な奥の意味が、辞書などでは表しきれないことを証明するためである。

③ 上田篤の指摘を取り上げたのは、神社の参道に関する考えには共感しつつ、奥については対立する見解をもつことを強調するためである。

④ 槇文彦の文章を取り上げたのは、奥についての先駆的な論として紹介し解説を加えることによって、自説の説得力を高めるためである。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第2問　次の文章は、夏目漱石の小説『彼岸過迄』の一節である。「僕」と従妹の田口千代子は、幼いうちに「僕」の母が将来の結婚を申し入れた間柄である。父の死後、母は「僕」と千代子との結婚を強く望むが、「僕」は積極的に千代子を求めようとしない。以下の文章は、田口家の別荘を「僕」と母が訪れた場面である。これを読んで、後の問い（**問1～6**）に答えよ。（配点　50）

田口の叔母は、高木さんですといって丁寧にその男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊まった血色のいい青年であった。年からいうと、あるいは僕より上かもしれないと思ったが、そのきびきびした顔つきを形容するには、是非とも青年という文字が必要になったくらい彼は生気に充ちていた。僕はこの男を始めて見た時、これは自然が反対を比較するために、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなかろうかと疑った。無論その不利益な方面を代表するのが僕なのだから、こう改まって引き合わされるのが、僕にはただ悪い洒落としか受け取られなかった。

二人の容貌が既に意地のよくない対照を与えた。しかし様子とか応対ぶりとかになると僕は更に甚だしい相違を自覚しない訳にいかなかった。僕の前にいるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血族ばかりであるのに、それらに取り巻かれている僕が、この高木に比べると、かえってどこからか客にでも来たように見えたくらい、彼は自由に遠慮なく、しかもある程度の品格を落とす危険なしに己を取り扱う術を心得ていたのである。知らない人を怖れる僕にいわせると、**A**この男は生まれるや否や交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となったのだと評したかった。彼は十分と経たないうちに、凡ての会話を僕の手から奪った。そうしてそれを悉く一身に集めてしまった。その代わり僕を除け物にしないための注意を払って、ときどき僕に一句か二句の言葉を与えた。それがまた生憎僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にする事も出来ず、高木一人を相手にする訳にもいかなかった。彼は田口の叔母を親しげにお母さんお母さんと呼んだ。千代子に対しては、僕と同じように、千代ちゃんという幼馴染みに用いる名を、自然に命ぜられたかのごとく使った。そうして僕に、先ほどお着きになった時は、ちょうど千代ちゃんと貴方のお噂をしていたところでしたといった。

僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかった。話をするところを聞いて、すぐ及ばないと思った。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには充分だったかもしれない。けれどもだんだん彼を観察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せつけるような態度で、誇り顔に発揮するのではなかろうかという疑いが起こった。その時僕は急に彼を憎み出した。そうして僕の口を利くべき機会が廻って来てもわざと沈黙を守った。

落ちついた今の気分でその時の事を回顧してみると、こう解釈したのはあるいは僕の僻みだったかも分からない。僕はよく人を疑る代わりに、疑る自分も同時に疑わずにはいられない性質だから、結局他に話をする時にもどっちと判然したところがいいにくくなるが、もしそれが本当に僕の僻み根性だとすれば、その裏面にはまだ凝結した形にならない嫉妬が潜んでいたのである。

僕は男として嫉妬の強い方か弱い方か自分にもよく解らない。競争者のない一人息子としてむしろ大事に育てられた僕は、少なくとも家庭のうちで嫉妬を起こす機会をもたなかった。小学や中学は自分より成績のいい生徒が幸いにしてそうなかったためか、至極太平に通り抜けたように思う。高等学校から大学へかけては、席次(注1)にさほど重きを置かないのが、一般の習慣であった上、年ごとに自分を高く見積もる見識というものが加わって来るので、点数の多少は大した苦にならなかった。これらを外にして、僕はまだ痛切な恋に落ちた経験がない。一人の女を二人で争った覚えはなおさらない。自白すると僕は若い女殊に美しい若い女に対しては、普通以上に精密な注意を払い得る男なのである。往来を歩いて綺麗な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時のように晴れやかな心持ちになる。たまにはその所有者になってみたいという考えも起こる。しかしその顔とその着物がどうはかなく変化し得るかをすぐ予想して、酔いが去って急にぞっとする人の浅ましさを覚える。

B 僕をして執念く美しい人に附纏(注2)わらせないものは、まさにこの酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎない。僕はこの気分に乗り移られるたびに、若い自分が突然老人か坊主に変わったのではあるまいかと思って、非常な不愉快に陥る。が、あるいはそれがために恋の嫉妬というものを知らずに済ます事が出来たかもしれない。

僕は普通の人間でありたいという希望をもっているから、嫉妬心のないのを自慢にしたくも何ともないけれども、今話したような訳で、眼の当たりにこの高木という男を見るまでは、そういう名の付く感情に強く心を奪われた試しがなかったのである。僕はその時高木から受けた(ア)名状し難い不快を明らかに覚えている。そうして自分の所有でもない、また所有にする気もない千代子が原因で、この嫉妬心が燃え出したのだと思った時、C僕はどうしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした。僕は存在の権利を失った嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。幸い千代子と百代子が日が薄くなったから海へ行くといい出したので、高木が必ず彼らについて行くに違いないと思った僕は、早くあとに一人残りたいと願った。彼らは果たして高木を誘った。ところが意外にも彼は何とか言い訳を拵えて容易に立とうとしなかった。僕はそれを僕に対する遠慮だろうと推察して、ますます(イ)眉を暗くした。彼らは次に僕を誘った。僕はもとより応じなかった。高木の面前から一刻も早く逃れる機会は、与えられないでも手を出して奪いたいくらいに思っていたのだが、今の気分では二人と浜辺まで行く努力が既に厭であった。母は失望したような顔をして、いっしょに行っておいでなといった。僕は黙って遠くの海の上を眺めていた。姉妹は笑いながら立ち上がった。

「相変わらず偏屈ね貴方は。まるで腕白小僧みたいだわ」

千代子にこう罵られた僕は、実際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたろう。僕自身も腕白小僧らしい思いをした。調子のいい高木は縁側へ出て、二人のために菅笠のように大きな麦藁帽を取ってやって、行っていらっしゃいと挨拶をした。

二人の後ろ姿が別荘の門を出た後で、高木はなおしばらく年寄りを相手に話していた。こうやって避暑に来ていると気楽でいいが、どうして日を送るかが大問題になってかえって苦痛になるなどと、実際活気に充ちた身体を暑さと退屈さに持ち扱っている(注3)ふうに見えた。やがて、これから晩まで何をして暮らそうかしらと独り言のようにいって、不意に思い出したごとく、玉はどうですと僕に聞いた。幸いにして僕は生まれてからまだ玉突きという遊戯を試みた事がなかったのですぐ断った。高木はちょうどいい相手が出来たと思ったのに残念だといいながら帰って行った。僕は活発に動く彼の後ろ影を見送って、彼はこれから姉妹のいる浜辺の方へ行くに違いないという気がした。けれども僕は坐っている席を動かなかった。(注4)

高木の去った後、母と叔母は少時彼の噂をした。初対面の人だけに母の印象は殊に深かったように見えた。(ウ)気の置けない、いたって行き届いた人らしいといって賞めていた。叔母はまた母の批評をいちいち実例に照らして確かめるふうに見えた。この時僕は高木について知り得た極めて乏しい知識のほとんど全部を訂正しなければならない事を発見した。僕が百代子から聞いたのでは、亜米利加帰りという話であった彼は、叔母の語るところによると、そうではなくって全く英吉利で教育された男であった。叔母は英国流の紳士という言葉を誰かから聞いたと見えて、二、三度それを使って、何の心得もない母を驚かしたのみか、だからどことなく品の善い所があるんですよと母に説明して聞かせたりした。母はただへえと感心するのみであった。

二人がこんな話をしている内、僕はほとんど一口も口を利かなかった。ただ上辺から見て平生の調子と何の変わる所もない母が、この際高木と僕を比較して、腹の中でどう思っているだろうと考えると、僕は母に対して気の毒でもありまた恨めしくもあった。同じ母が、千代子対僕という古い関係を一方に置いて、さらに千代子対高木という新しい関係を一方に想像するなら、果たしてどんな心持ちになるだろうと思うと、仮令少しの不安でも、避け得られるところをわざと与えるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、僕はただでさえ不愉快な上に、年寄りに済まないという苦痛をもう一つ重ねた。

前後の模様から推すだけで、実際には事実となって現れて来なかったから何ともいいかねるが、叔母はこの場合を利用して、もし縁があったら千代子を高木に遣るつもりでいるくらいの打ち明け話を、僕ら母子に向って、相談とも宣告とも片付かない形式の下に、する気だったかもしれない。凡てに気が付くくせに、こうなるとかえって僕よりも迂遠い母はどうだか、僕はその場で叔母の口から、僕と千代子と永久に手を別つべき談判の第一節を予期していたのである。幸か不幸か、叔母がまだ何もいい出さないうちに、姉妹は浜から広い麦藁帽の縁をひらひらさして帰って来た。**D**僕が僕の占いの的中しなかったのを、母のために喜んだのは事実である。同時に同じ出来事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。

夕方になって、僕は姉妹とともに東京から来るはずの叔父を停車場に迎えるべく母に命ぜられて家を出た。彼らは揃いの浴衣を着て白い足袋を穿いていた。それを後ろから見送った彼らの母の眼に彼らがいかなる誇りとして映じたろう。千代子と並んで歩く僕の姿がまた僕の母には画として普通以上にどんなに価が高かったろう。僕は母を欺く材料に自然から使われる自分を心苦しく思って、門を出る時振り返って見たら、母も叔母もまだこっちを見ていた。

（注）

1　席次――成績の順位。

2　附纏わらせない――「附纏わる」は「つきまとう」に同じ。

3　持ち扱っている――取り扱いに困って、もてあましている。

4　玉――ここでは「玉突き」を略して言っている。玉突きは、ビリヤードのこと。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14 。

(ア)　名状し難い　12

① 言い当てることが難しい
② 名付けることが不可能な
③ 意味を明らかにできない
④ 何とも言い表しようのない
⑤ 全く味わったことのない

(イ)　眉を暗くした　13

① 迷惑に思い顔をしかめた
② 心配に思い顔をゆがめた
③ 不審に思い顔色を変えた
④ 不愉快に思い表情をくもらせた
⑤ 不安に思い表情をこわばらせた

(ウ)　気の置けない　14

① 気分を害さず対応できる
② 遠慮しないで気楽につきあえる
③ 落ち着いた気持ちで親しめる
④ 気を遣ってくつろぐことのない
⑤ 注意をめぐらし気配りのある

問2　傍線部A「この男は生まれるや否や交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となったのだと評したかった」とあるが、そのように高木を評する「僕」の思いを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 初対面の人にも全くものおじせず、家族のように親しげに周囲の人の名を呼ぶので、羨ましく思っている。

② 明るく話し上手で人づきあいに長けているうえ、そつのない態度で会話を支配するので、不快に思っている。

③ 周囲のすべての人に配慮しつつも、その態度はおしつけがましいものでもあるので、うっとうしく思っている。

④ 品格もあり容貌も立派な人物だが、完全無欠な態度によって「僕」の居場所を脅かすので、憎らしく思っている。

⑤ 洋行帰りという経歴の持ち主であり、自分をよく見せる作為的な振る舞いをするので、面白くなく思っている。

問3　傍線部B「僕をして執念く美しい人に附纏わらせないものは、まさにこの酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎない」とあるが、この部分で「僕」は自分をどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① 美しい女性への関心が人一倍あるにもかかわらず、痛切な恋に落ちた経験がないために、自分からはどのように女性に対したらよいかわからないと感じている。

② 美しい女性と過ごしたいという気持ちを持つ一方で、その美しさは表面的なものに過ぎないとわかっているので、自分は惑わされることはないと考えている。

③ 美しい女性を見ると気持ちは高ぶるが、幼いころから感情を抑制してきたため、自分は美しさや魅力を率直に認める感性を失ってしまったと考えている。

④ 美しい女性の魅力に安易に惹(ひ)かれることを不愉快に感じ、自己を律して冷静な自分に立ち返り欲望を抑えなければならないと考えている。

⑤ 美しい女性も時の経過とともに変化していくことを想像するとすぐに冷めてしまい、自分は対象に熱中できず満たされることがないと感じている。

問4　傍線部C「僕はどうしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした」とあるが、なぜ「僕」はこのような気持ちになったのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 「僕」は常々普通の人間でいたいという希望を持っていたため、人並みに嫉妬心を持っていても不思議ではないと考えていた。千代子に高木と比較されたという思いによって生じた「僕」の僻み根性が、そうした感情と結びついてしまったことにやりきれなさを覚えたから。

② 「僕」は高木の登場によって、これまでの自己認識を超えるような嫉妬心を抱いた。高木への僻み根性に根ざしたその感情は、恋人と意識したこともない千代子を介して生じたものであり、そうした感情を制御しない限り、自分を卑しめることになるような気がしたから。

③ 「僕」は今まで本当に女性を愛した経験はなかったが、ライバルである高木の存在によって初めて千代子を愛しているのではないかと考えはじめた。高木に対する嫉妬心を消し去らなければ、千代子と純粋な気持ちで恋愛はできないと気づいたから。

④ 「僕」は一人息子として生まれたうえ、学校にも競争者がいなかったため、嫉妬心を抱く環境になかった。千代子を恋人として扱う高木に萌し始めた嫉妬心は、経験したことのない感情であり、そうした感情によって動揺する自分を浅ましいものと判断したから。

⑤ 「僕」は今まで若い女性に対してあまりに臆病であったために、本来は恋にかかわる嫉妬心が起こるはずはなかった。如才なく振る舞う高木によってかき立てられた、そうした嫉妬の感情が自分の自制心を失わせることに気づいて羞恥を覚えたから。

問5　傍線部D「僕が僕の占いの的中しなかったのを、母のために喜んだのは事実である。同時に同じ出来事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない」とあるが、この部分での「僕」の心情はどのようなものと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

① 高木を千代子の結婚相手にしたいと叔母が言わなかったことは、「僕」との縁談を期待する母の気持ちを考えるとよかったが、その一方で、「僕」と千代子との縁談の可能性が消えないまま、どっちつかずの状況に留まることになりいらだちを感じている。

② 高木と千代子の結婚を予期しない母の驚きや動揺に配慮した叔母が、二人の結婚話を持ち出さなかったのはよかったが、その一方で、千代子の結婚相手として自分にも見込みがあるという思いとともに、事態はまだ流動的であるという不安を感じている。

③ 内心では高木が千代子の結婚相手になるのもやむを得ないと考えている母に、叔母が二人を結婚させたいと打ち明けることは避けられたので安心したが、その一方で、高木と比べると千代子の結婚相手として劣る自分にじれったさを感じている。

④ 母が高木に好印象を持ったことを察した叔母が、そのことに乗じて千代子と高木の縁談を持ち出すのではないかという不安がぬぐわれてほっとしたが、その一方で、母の抱いた印象が「僕」と高木とを比較した結果でもあることに不満を感じている。

⑤ 高木と千代子に縁談が持ち上がっていることを叔母が明かさなかったため、千代子と「僕」の結婚を望む母の期待が続くことを喜んだが、その一方で、千代子と結婚する意志のないまま母を欺き通さなければならないことに歯がゆさを感じている。

問6　この文章における表現の特徴についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 19 ・ 20 。

① 初めて嫉妬に心を奪われることになった経緯を、「僕」の心情の描写よりも、高木をめぐる母と叔母の噂話、千代子と高木とのやりとり、高木の「僕」に対する態度の描写などを通して示している。

② 「落ち着いた今の気分でその時の事を回顧してみると」とあるように、出来事全体を見渡せる「今」の立場から、当時の「僕」の心情や行動について原因や理由を明らかにしながら描いている。

③ 「僕」自身の心情を回顧的に語る部分に現在形を多用することで、別荘での出来事から遠く隔たった現在においても、「僕」の内面の混乱が整理されないまま未だに続いていることを示している。

④ 「凝結した形にならない嫉妬」「存在の権利を失った嫉妬心」などのように、漢語や概念的な言葉で表現することによって、「僕」が自分の心情を対象化し分析的にとらえようとしていることがわかる。

⑤ 笑いながらの千代子の発言を「罵られた」と述べたり、玉突きの経験がないことを「幸いにして」と述べたりすることによって、出来事をそのままには受け取ろうとしない「僕」の屈折したユーモアを示している。

⑥ 「自然が反対を比較する」「会話を僕の手から奪った」「自然から使われる自分」などの表現から、擬人法を用いることで、「僕」が抽象的なものごとをわかりやすく説明しようとしていることがわかる。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第3問

次の文章は、浅井了意『狗張子』の一話である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点　50）

福島角左衛門は、生国、播州姫路の者なり。（注1）久しく宮仕へもせずして居たりしが、そのころ、太閤秀吉の内、福島左衛門大夫とは少し旧交あるゆゑに、これを頼み、しかるべき取り立てにもあひ、奉公せばやと思ひ、故郷を出でて都におもむく。明石、兵庫の浦を過ぎて尼が崎に出で、やうやう津の国高槻（注3）のほとりに至りぬれば、しきりに喉かわきぬ。路のかたはらを見るに、小さき人家あり。その家、ただ女房一人あり。その容貌の美しさ、またかかる辺鄙にはあるべきとも思はれず。窓のあかりに向かうて足袋を縫ふ。角左衛門立ち寄りて、湯水を請ふ。女房、「やすきほどのことなり」と、隣の家に走り行きて、茶をもらうて、与へぬ。

角左衛門、しばし立ちやすらひ、その家の中を見めぐらすに、厨（注4）、かまどの類もなし。角左衛門、あやしみて、「いかに、火を焚くことは、し給はずや」と問ふ。女房、「家貧しく身衰へて、飯を炊ぎてみづから養ふことかなはず。あたり近き人家に雇はれてその日を送る、まことにかなしき世渡りにて侍る」と、語るうちにも足袋を縫ふ。そのけしき、はなはだ忙はしく、いとまなき体と見ゆ。角左衛門、その貧困辛苦の体を見て、かぎりなくあはれにおぼえ、また、その容貌の(ア)優にやさしきに見とれて、やや傍に寄り、手を取りて、「かかる艶なる身をもちて、この辺鄙に貧しく送り給ふこそ遺恨なれ。我に従ひて、都にのぼり給へかし。よきにはからひ奉らん」と、A少しその心を挑みける。女房、(イ)けしからず振り放ちて、いらへもせず。ややありて、「我には、定まれ a る夫侍り。名を藤内とて、布を商ふ人なり。交易のために他国に出づ。わが身はここにとどまりて、家を守り、つつしんで舅姑に孝行を尽くし、みづから女の職事をつとめて、貧しき中にも、いかにもして朝暮の養ひをいたし、飢寒に及ばざらんことをはかる。今すでに十年に及べり。幸ひ、明日、わが夫帰り来る。はや、とく、立ち去り給へ」と言へば、角左衛門、大きにその貞烈を感じ、B悔い愧ぢて、僕（注5）に持たせたる破籠（注6）やうのものを開き、餅、果物取り出だし、女房に与へ、去りぬ。

その夜は山崎に宿(注7)しけるが、あくる朝、かの女房のところに、所用のこと書きたる文とり落としけるゆゑ、跡へ戻りけるところに、道にて葬礼にあへり。「いかなる人 b にや」と尋ぬれば、「布商人藤内を送る」と言ふ。角左衛門、大いに驚きあやしみて、その葬礼に従ひて墓所に至れば、すなはち昨日女房にあひしところなり。今見れば、家もなく跡も失せて、ただ草蕭々たる(注8)野原なり。その地を掘り葬るところを見れば、藤内が女房の棺あり。棺の中に、あたらしき足袋一双、餅、果物ありのまま見ゆ。また、そのかたはらに古き塚二つあり。これを問へば、すなはち「その舅姑の塚なり」と。その年数を問へば、「十年に及ぶ」と言ふ。角左衛門、感激にたへず、送り c し者に右のあらまし語り、鳥目(注9)など配り与へて、ともに送葬の儀式を資け、かつ跡の弔ひのことまで(ウ)ねんごろにはからひて、そののち都へのぼりける。

C ああ、この女房、 X といへども婦道を忘れず、舅姑に孝行を尽くして夫を待つ。いはんや、その Y 時は知りぬべし。

(注)
1 播州――播磨国。現在の兵庫県南西部。
2 太閤秀吉の内、福島左衛門大夫――豊臣秀吉の家臣であった福島正則。
3 津の国――摂津国。現在の大阪府北部と兵庫県東部にわたる地域。
4 厨――厨房。台所。
5 僕――召使いの男。しもべ。
6 破籠――木製の弁当箱。
7 山崎――地名。現在の京都府乙訓郡大山崎町の辺り。都のある山城国と摂津国を結ぶ交通の要所。
8 草蕭々たる――草がものさびしく風にそよぐさま。
9 鳥目――金銭。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 21 ～ 23 。

(ア)　優にやさしきに　21

① 上品で優美である様子に
② 他より際だって美しい様子に
③ 優雅でほっそりしている様子に
④ 凜としていて品位がある様子に
⑤ 穏やかで慈愛に満ちている様子に

(イ)　けしからず振り放ちて　22

① 男の無礼を不思議にも放っておいて
② 男の誘いを当然のごとく拒絶して
③ 男の手をたいそう強く払いのけて
④ 自分の迷いを不道徳だと断ち切って
⑤ 自分の怒りを非常識なほど露にして

(ウ)　ねんごろにはからひて　23

① じっくりと計画を立てて
② こと細かに命じて
③ 熱心に相談して
④ 心を込めて処置して
⑤ 仰々しく世話をして

問2　波線部a～cの文法的説明として正しい組合せを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① a 自発の助動詞　b 格助詞　c 過去の助動詞
② a 自発の助動詞　b 断定の助動詞　c サ行変格活用の動詞
③ a 下二段活用の動詞の一部　b 格助詞　c サ行変格活用の動詞
④ a 完了の助動詞　b 断定の助動詞　c サ行変格活用の動詞
⑤ a 完了の助動詞　b 断定の助動詞　c 過去の助動詞

問3　傍線部A「少しその心を挑みける」から傍線部B「悔い愧ぢて」に至る、角左衛門の心情の変化の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① 女に心を動かされて気を引こうと試みたけれども、女の怒りの激しさに圧倒され、恐れ入って後悔した。
② 女に惹(ひ)かれ言い寄ってみたものの、女の境遇や意思を知って、自己の軽はずみな行為を反省し恥じ入った。
③ 女を貧しさゆえ侮っていたけれども、厳しくたしなめられて女を見直し、己の人を見る目のなさを自省した。
④ 女に好意を示したものの、実は既婚者であると分かり、自分の妻にできないことを内心残念に思った。
⑤ 女の本心を試すためにわざと軽々しく振る舞ったけれども、それが無用な行為だったと悟り、猛省した。

問4 傍線部C「ああ、この女房……知りぬべし」は、本文に語られている逸話に対する作者自身の評言に当たる部分である。これについて、次の(1)、(2)に答えよ。

(1) 空欄 X ・ Y に入る語句の組合せとして、最もふさわしいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① X 貧し　Y 豊かなる
② X 情けなし　Y 情けある
③ X 艶なり　Y 衰へたる
④ X 死す　Y 生ける
⑤ X 飢う　Y 足れる

(2) ここで作者はどのような感想を抱いているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 筋を通した女の生き方に心を打たれながらも、その薄幸な生涯に同情を覚えている。
② 夫と義父母にどこまでも尽くし通した女の誠実さに感銘を受け、心から称賛している。
③ 決して浮気心を起こさなかった女の態度を、世の人々も見習うべきと訴えかけている。
④ けなげに生きた女が全く報われないままに亡くなった、この世の不条理を嘆いている。
⑤ 気丈に生きた女が死後にやっと報われ往生を遂げたであろうことに、安堵(あんど)している。

問5　本文の内容に合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 28 ・ 29 。

① 角左衛門は借金の取り立てから逃れて都へ上る途中、美しい女の世話になり、その家に忘れた手紙を取りに戻ったところで藤内の葬儀の列に出くわした。

② 女は角左衛門と会った翌日に死去し、人情に厚い角左衛門はこれを助けてやれなかったことを悔やんで、女の葬礼に参列したのちに都へ向かった。

③ 藤内の留守の間、女は忍耐強く藤内の帰りを待ちながら懸命に家を守っていたにもかかわらず、ついにこの世で共に暮らすことはできなかった。

④ 角左衛門は生真面目（きまじめ）とばかりは言えないものの情け深く、旅の途中で出会った女に食べ物を施したり、藤内の葬儀に際して援助を行ったりした。

⑤ 角左衛門の誘いを不粋にも受け入れなかった女は、実は十年も前に死去しており、幽霊となってなお婚家に留（とど）まり義父母に一途（いちず）に仕え続けていた。

⑥ 藤内が布商人に伴われ都から帰って来た時には女は既に亡くなっており、藤内は驚き嘆いたが、角左衛門はこれを励まし葬儀を行うのを手伝った。

問6 『狗張子』の表現および文学史に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 30 。

① 平安時代に盛行した物語文学の流れをくみ、「あはれにおぼえ」「驚きあやしみて」「感激にたへず」のような心情表現を重視した叙情的な文体で記されている。同じ江戸時代に成立した作品に、松尾芭蕉の『笈の小文』がある。

② 平安時代に盛行した物語文学の流れをくみ、「世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」などの和歌表現を取り入れた流麗な文体で記されている。同じ江戸時代に成立した作品に、井原西鶴の『世間胸算用』がある。

③ 鎌倉時代に盛行した説話文学の流れをくみ、「走り行きて」「貧困辛苦の体を見て」「墓所に至れば」のような人物の行動を中心にした叙事的で簡潔な文体で記されている。同じ江戸時代に成立した作品に、上田秋成の『雨月物語』がある。

④ 鎌倉時代に盛行した説話文学の流れをくみ、「布商人藤内を送る」「その舅姑の塚なり」「十年に及ぶ」といった短い会話を多用する歯切れよい文体で記されている。同じ江戸時代に成立した作品に、式亭三馬の『東海道中膝栗毛』がある。

⑤ 鎌倉時代に盛行した軍記物語の流れをくみ、「飢寒に及ばざらんことをはかる」「ただ草蕭々たる野原なり」のような漢文訓読調の文体で記されている。同じ江戸時代に成立した作品に、十返舎一九の『南総里見八犬伝』がある。

（下書き用紙）

国語の試験問題は次に続く。

第4問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）（配点 50）

隋ノ田・楊(注1)(ア)与ニ鄭(注2)法士一俱ニ以レ能レ画ヲ名。法士自知芸不如楊也。

乃チ従レ楊ニ求ニ画本一、楊不レ告レ之ニ。一日引キテ法士一至ニ朝堂ニ、指ニ以テシテ宮闕(注3)・(1)

衣冠・人馬・車乗ヲ、曰ク、「此レ吾ガ画本也。子知ルレ之ヲ乎。」由リテ是ニ法士悟リテ而(2)

芸進メリ。

唐ノ韓幹(注4)以テ貌ルレ馬ヲ召サレ、入リテ供奉ぐ。(注5)明皇詔令従陳閎(注7)受画法。幹

因リテ奏スラク、「臣ニ自ラ有リレ師。陛下ノ内厩ノ飛黄(注8)・照夜・五方(注9)之乗、皆臣ノ師也。」

帝然リトスレ之ヲ。其ノ後幹ノ画遂ニ果タシテ踰ユレ閎ヲ。

若キハニ楊・韓ノ二子ノ、可キレ謂フ能クルヲ求ムルニ其ノ真ノ者トニ也。彼ノ以テレ似ヲ求ムルレ似ヲ者ハ、則チ益マス

遠シ矣。今之学者、雖モ曰フレ求ムト聖人之経ヲ、(注10)固(イ)已ニ非ズ其ノ真ニ。D乃チ舎テテ経ヲ而専ラ求ムルハ訓詁ニ、則チ又求ムルレ似ルヲ其ノ似タルニ之ニ者ナリ矣。不ニ尤モ遠カラ乎。

（胡直『衡廬精舎蔵稿』による）

（注）

1 田・楊――田僧亮と楊契丹のこと。ともに隋代の画家。

2 鄭法士――隋代の画家。

3 宮闕――宮殿のこと。

4 韓幹――唐代の画家。

5 供奉――官名。才芸あるものが皇帝の身辺に仕えた。

6 明皇――唐の玄宗皇帝。

7 陳閎――唐代の画家。

8 飛黄・照夜――ともに駿馬の名。

9 五方之乗――各地方から集められた馬。

10 経――聖人の教えや言行を記した書物。

11 訓詁――「経」の字句の注釈。

問1　二重傍線部(ア)「与」・(イ)「固」の読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 31 ・ 32 。

(ア)「与」 31

① あづかりて
② より
③ くみして
④ と
⑤ あたへて

(イ)「固」 32

① つねに
② かたく
③ もとより
④ ゆゑに
⑤ かへつて

問2　傍線部A「法士自知芸不如楊也」・傍線部B「明皇詔令従陳閎受画法」の返り点の付け方と書き下し文の組合せとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 33 ・ 34 。

A　法士自知芸不如楊也　33

① 法士自レ知レ芸不レ如レ楊也　法士芸を知りてより楊のごとくならざるなり
② 法士自知二芸不一レ如レ楊也　法士自ら芸の楊に如かざるを知るなり
③ 法士自知レ芸不レ如レ楊也　法士自ら芸を知ること楊のごとくならざるなり
④ 法士自知二芸不レ如楊一也　法士自ら芸の如かざるは楊なるを知らんや
⑤ 法士自レ知二芸不一レ如レ楊也　法士芸の楊のごとくならざるを知るによらんや

B　明皇詔令従陳閎受画法　34

① 明皇詔令三従陳閎受二画法一　明皇詔して従ひし陳閎をして画法を受けしめんとす
② 明皇詔令レ従二陳閎受画法一　明皇詔して陳閎の受けし画法に従はしめんとす
③ 明皇詔令下従二陳閎一受中画法上　明皇詔して陳閎に従ひて画法を受けしめんとす
④ 明皇詔令二従陳閎一受三画法一　明皇詔して陳閎を令従し画法を受けしめんとす
⑤ 明皇詔令従陳閎受二画法一　明皇詔して令従の陳閎をして画法を受けしめんとす

問3　傍線部(1)・(2)の「画本」は、いずれも「絵の手本」という意味であるが、それぞれが指示する内容は異なっている。両者の相違を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① (1)は絵の描き方が示された書物を想定しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。一方、(2)は手本とすべき絵を指しており、第二段落では「幹画」がこれと対応している。

② (1)は手本とすべき絵を想定しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。一方、(2)は描くべき対象の種類を指しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。

③ (1)は絵の描き方が示された書物を想定しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。一方、(2)は描く対象そのものを指しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。

④ (1)は描く対象そのものを想定しており、第二段落では「馬」がこれと対応している。一方、(2)は描くべき対象の種類を指しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。

⑤ (1)は手本とすべき絵を想定しており、第二段落では「画法」がこれと対応している。一方、(2)は描く対象そのものを指しており、第二段落では「臣師」がこれと対応している。

問4　傍線部C「可レ謂下能　求二其　真一者上也」とあるが、絵画における「真を求むる者」とはどのような人物であると、筆者は考えているか。それを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 絵画の理論や技巧を求めるのではなく、絵を描くことを通して普遍的真理を得ようとする人物。
② 朝堂の壁画や皇帝秘蔵の絵画を研究して、古人の画法の特徴を自ら学びとろうとする人物。
③ 自分よりも優れた人物を自ら探し求め、その人物に師事して絵画の本質を探ろうとする人物。
④ 名画や有名な画家から学ぶのではなく、対象をよく観察してその実体を写しとろうとする人物。
⑤ 他人の意見に左右されることなく、自分の信念に従って独自の画法を見いだそうとする人物。

問5　傍線部D「乃　舎レ経　而　専　求二訓　詁一」とあるが、「経」と「訓詁」に関する筆者の考え方を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37 。

① 「経」は真の似であり「訓詁」も真の似である。したがって、真を求める学者は「経」と「訓詁」に精通する必要がある。
② 「経」は真の似であり「訓詁」は似の似である。したがって、真を求める学者は「経」の内容を探究する必要がある。
③ 「経」は似の似であり「訓詁」も似の似である。したがって、真を求める学者は「経」も「訓詁」もともに必要としない。
④ 「経」は似の真であり「訓詁」は似の似である。したがって、真を求める学者は「経」の価値を判断する必要がある。
⑤ 「経」は似の真であり「訓詁」は真の似である。したがって、真を求める学者は「訓詁」の意味を理解する必要がある。

問6　この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38 。

① 「今の学者」の抱える問題点について、「宮闕・衣冠・人馬・車乗」、「飛黄・照夜・五方の乗」などを「訓詁」の比喩(ひゆ)として挙げることによって、読者の理解を容易にしている。

② 鄭法士と陳閎の二人の画家を「聖人」の比喩として挙げ、彼らが「真を求むる者」であることを示したうえで、ひたすら似を求める「今の学者」の問題点を、読者に訴えかけている。

③ 「真を求むる」方法は多様であることを画家の逸話によって例示し、それを前提としたうえで、学問における「今の学者」に対する筆者の批判を、「已」「又」などを多用しながら、論理的に展開している。

④ 多くの対象を「画本」として絵を描くことができる画家と、一つの対象しか「師」にできない画家とを対比的に例示することによって、「訓詁」に専心する「今の学者」に対する筆者の批判を提示している。

⑤ 「真を求むる者」の具体例として画家の逸話を挙げ、これと「今の学者」の問題とを対比的に論じることによって、学問における真とは何かという問題を、読者に投げかけている。